

# 歌を用いて創造性と運用能力を高める英語授業実践報告

## Educational Report in English: Practical Studies for Enhancing Creativity and Language Skills through Using Songs in the Classroom

関 戸 冬 彦  
Sekido Fuyuhiko

### はじめに

英語教育に歌を活用して授業を行う実践例は数多くある。大概の場合、それらは中学校などでの実践であり、英語に親しませる目的や積極的な学習姿勢を養うための活用であることが多い。こうした活用例は大学の英語教育にも転用可能なのだろうか？あるいは、どのようなアプローチをかけたなら大学の英語の授業らしくできるのだろうか？本稿はそのような、大学の授業における英語の歌の活用方法を考慮に入れた上で行った授業の実践報告である。なお、本報告の該当授業は獨協大学国際教養学部言語文化学科の選択科目「英語演習Ⅱ」（2014年度秋学期開講，3，4年生対象）である。

### 1 歌を用いることの利点と注意点

まず、歌を英語の授業で用いる利点を確認しておきたい。これまで中学校で歌を活用した授業を数多く行ってきた中嶋洋一が「英語の歌を歌うことで、英語を身近に感じます。」(3)と指摘するように、歌を用いる大きな利点として「親しみやすさ」があげられる。ただ単に与えられた教科書の英文を黙って読んだり聞いたりしているより、メロディにのった歌詞を聞き、その意味を考えたりする方がインプットしてはいきいきと入ってくることは容易に予想される。ましてや、それが知っている歌や好きなアーティストの楽曲だったらなおのこと、学習者はその歌と英語に興味を持つだろう。中にはそれを学習だと忘れるくらいにのめり込む者すらいるかもしれない。

次に、歌は歌詞を読む、CDなどの音源を聞く、実際に声に出して歌う、など活動としての用途も広い。中嶋も同じく「英語の歌詞は発展性のある優れた教材です。聞き取り、読み取り、自己表現など、発展のさせ方は、それぞれ教師のアイデア次第で限りなく生まれてきます。」(3)とその点を認め、歌の活用を推奨している。もちろん、これらは検定教科書などであっても同じことが出来るが、先に述べたように、教材への取り組みやすさから言えば、「親しみやすさ」と相まって、歌のほうが教科書などよりも有効であろう。たとえば、これは執筆者一個人の経験談だが、私は高校二年生の時、初めてThe BeatlesのShe Loves Youを聞いた。この歌詞の中で、ひとつだけ知らない単語があった。それはapologizeだった。辞書を引き、その意味が「謝る」と知って以来、この単語の意味を忘れたことは一度もない。それくらい、強烈な印象が私の胸に残った。同じThe Beatlesでは、文法事項も学んだ。代表的なのはLet It Beのletが第5文型の動詞であること、All You Need Is Loveのallの後には関係代名詞目的格

のthatまたはwhichが省略されていること、I Should Have Known Betterは仮定法過去完了形であること、など今でも文法事項を説明する時に使える例文でもある。このように、一個人の経験ではあるものの、興味があるものと学習事項とが結びついた時、その印象はとても強く、また記憶の定着力も高いことがわかる。

先に指摘した用途の広さを内容の広さにも目を向けると、歌そのものだけではなく、歌詞や歌手にまつわるエピソードからも学ぶことができる。たとえば、Eric ClaptonのLaylaを取り上げるならば、この曲のテーマは道あらぬ恋、しかもClaptonが先のThe Beatlesのメンバー、George Harissonの妻、Patty Boydを想って創り、歌った歌と知るとは歌詞への興味と理解を深めるだけでなく、当時の状況などを綴った資料などを読む、いわば時代背景などの文化的な学習の機会にもなる。また、これに関してClapton自身がCNNのLarry King Live Showで自身の口からそのエピソード、当時の心境などを語っているのでその場面を見せる、聞かせる、ことも可能だ。これも中嶋の言う教材の「発展性」に合致するだろう。

このように、歌だけでなく歌から派生する事柄を取り込むことで様々なスキルやコンテンツと接することが比較的容易に出来る。つまり、教材と活動のパラエティが豊富になるのである。こうした要素が授業をより活性化させるのによりポイントであることはもはや誰も否定は出来ないだろう。

では次に注意点をあげてみる。歌が親しみやすさをもたらすことは先に述べた。しかし、歌を実際に歌うとなるとちょっと状況は異なる。クラスや対象年次、もしくは使用する歌そのものにもよるのかもしれないが、先生が「さあ、一緒に歌いましょう」と言っても、みんな恥ずかしがって小声でしか歌わない、むしろ静かになってしまう、などという状況になることはありうるだろうし、そういう報告を聞いたこともある。その意味では、先の教材としての有用性だけでは不十分で、上手なクラスの雰囲気作りを要求されるのかもしれない。中嶋も生徒たちがよく歌えるようにするポイントとして「まず、環境。」(23)と断言している。

また、先生が選ぶ好きな曲と生徒、学生たちの興味が必ずしも一致するとは限らない。そうすると、「先生だけ勝手に楽しんでいる」と捉えられかねないので、生徒や学生たちを魅了する選曲のセンスも必要だろう。もちろん、どの分野のコンテンツであってもこうした好き、嫌いはついてまわるが、親しみやすい歌である分だけ、そのセンスが合致しないと反動も大きくなってしまふ可能性はある。

さらに、リスニングとして使う場合、聞き取りがあまりにも難しい、あるいは簡単すぎる、など対象学習者の能力からあまりにもかけ離れてしまうものと本来大切にしなければならない学習への動機が失われてしまう可能性がないわけでもない、その点にも注意をしておきたい。難しすぎる歌は当然歌えないし、ましてや中嶋が言うように「音読できない歌は歌えない」(24)は自明だろう。よって、クラスの雰囲気、選曲のセンス、歌詞の難易度によく気を配ることが、せつかくの歌という教材を無駄にしないための気にかけるべき注意点となる。

## 2 日本人歌手が歌う/創る英語歌詞を用いた授業

さて、そうした利点と注意点を考慮に入れた上で、大学の授業にふさわしい歌の使い方を考えてみたい。すでに確認したように、中学校では歌は英語に親しませる目的や積極的学習姿勢を養うために用

いられることが多い。もちろん、この点は大学生にとっても同じく有効な点ではあるが、より大学生向けの、若干高度な使い方はないだろうか。執筆者はその点へのヒントとして、「日本人歌手が歌う/創る英語歌詞」に注目した。先に引用した中嶋は学年別や学習する文法項目別に使える曲を多数挙げている(104-112)が、その選曲のほとんどが洋楽、しかも知名度が高く、教室で授業内に使う教材としての意識から、歌詞が常識的教養の範囲や文法の難易度を極端に逸脱しないものがほとんどである。無論、大学においてもその点は踏襲されるべき部分でもあるが、学生たちの年齢やそれに伴う興味や知識の量の推移も考慮に入れると歌詞の内容や難易度の選択肢をより広げられることもあり、また今回あえて洋楽ではなく「日本人が歌う/創る歌」を取り上げることで、自分たちにも再現/創作が可能なのではないかをいう視点を取り込んでみた。つまり、自分たちで「英語の歌詞を書き、あるいは訳し、英語で歌えること」を、歌を通して学ぶ授業の最終目標にしたというわけである。なお、大学ではよくプレゼンテーションがSpeakingやPresentationといった科目の名のもとに行われるが、歌もパフォーマンスのひとつであるのだから、拡大解釈すれば歌うこともプレゼンテーションの範疇に含めることも出来るだろう。よって、創作とパフォーマンス、スキルの言おうと(クリエイティブ)ライティングとプレゼンテーション、の二つが「日本人歌手が歌う/創る英語歌詞」を通しての語学的学習事項の柱になるのである。

ではここからは実際の授業内容を紹介したい。最初に述べた通り、獨協大学国際教養学部言語文化学科の選択科目「英語演習Ⅱ」(2014年度秋学期開講、3、4年生対象)でこの内容を取り上げた。シラバスで歌を取り上げることは公開済(Appendix 1参照)であったが、詳しい内容、目標などは初回の授業にて説明した。最終目標を「英語で歌詞を書き、あるいは訳し、英語で歌える」に設定したとはいうものの、いきなり今から歌詞を書け、訳せ、と言ったところで即座に出来るわけもないので、最初はいろんな日本人の英語楽曲を、歌詞の点とパフォーマンス(発音など)の点から概観していくことにした。授業内にて取り上げた楽曲はAppendix 2の通りである。とりあげた楽曲の中にはアーティスト自身が英語で作詞、かつ歌っているものもあれば、日本語のものを国内外のカバーアーティストが自身もしくは翻訳者が英訳し、歌っているものもある。最終的には後者がお手本ようになっていくのだが、まずは幅広くいろんな楽曲に触れてもらった。なお、個々の楽曲の性質により語学学習としての側面のアプローチは毎回若干異なったので、ここではいくつかのものをその具体例として紹介しておきたい。

尾崎豊のI Love Youは、まずオリジナルの楽曲をYouTubeで見てももらった後、日本語の歌詞を紹介し、それを英訳してみることを授業内課題とした。英訳といっても日本語を英語にするだけでは不十分でメロディにはまるような訳にして、その訳でもって歌えなければならない。これがそんなに容易でないことは想像に難くない。よって、一人でフルコーラスやるとなるととても大変なので、近くの者同士グループになって担当を分割するなどし、協力的にやってもらった。一定の時間を与えて各グループの出来具合を確認した後に、一つの例として、Debbi Gibsonが英語で歌うI Love Youを同じくYouTubeで見てももらった。当然ではあるが、これは歌える訳になっている。ゆえに自分たちのものとすでに出来ている英訳のものとを比べることで、「この箇所はこうやって表現するんだ」「こうすればメロディにのせられるんだ」など、翻訳としての気づきが大きかったようである。

X JapanのTearsでは、歌詞の整合性を確認するアクティビティとして、歌詞の英語の部分(この楽曲は一番が日本語、二番が英語という構成になっている)を二行分ずつセットにして短冊のようにランダムにしたもの計四つを、歌詞の意味が通るように正しい順序に並べ変えてみる、という作業を行った。

歌詞をよく読み、意味を考えてみる活動である。これもグループで取り組んでもらった後、それぞれの見解を発表し、最後にオリジナルと比較した。かなり正解に近いグループもあれば、全く当たらなかったグループもあるようであった。なお、先のI Love YouもこのTearsも最終的には教室で、音源を流しつつ履修者全員で歌ってもらった。すでに本稿にて述べた注意点のところで、歌わせるにはクラスの「雰囲気作りが大切」と言及したが、このクラスの履修者たちは選択のクラスということもあり、歌を扱う授業とわかった上で履修しているのだから、その点で「歌わない」「むしろ静かになる」などの心配はせずに済んだし、逆に非常によく歌ってくれた。

授業の最終目標を「英語で歌詞を書き、あるいは訳し、英語で歌える」に設定した、と紹介したが、歌詞を書く、訳すのであって、作曲までするわけではない。正確に言うと、すでにある日本の楽曲を歌えるように英訳もしくは創作してみる、ところがねらいである。よって、そのような活動をすでに行っているカバー歌手の楽曲、存在は大いに、刺激的なほどに参考になる。中でもGILLEとBENIという二人のアーティストの楽曲は注目に値する。実はこの授業を企画するにあたってヒントにしたのが、GILLEという歌手の存在であった。執筆者が彼女の存在を知ったのは飛行機での機内ラジオで、自身が歌手になりたいという夢を持ち、注目してもらうにはどうしたらよいだろうと考えた際に、AKB48の楽曲を英訳し歌い、それをYouTubeに動画で投稿したというエピソードを聞いた。実際、これは大いに反響を呼び、オリジナルの作詞家である秋元康氏もその存在を認めたという<sup>1)</sup>。ラジオを聞いた際、「この活動は大きく捉えれば日本文化の英語での世界への発信ではないか」と考え、そういう意味において英語で書き、歌うというのは大学の授業として取り入れるにも十分価値のあることに思えたのである。BENIは日本の男性歌手の曲を中心に、自分で英語に訳して、その歌詞を歌っているのだからこの授業の目標をすでに実践しているアーティストである。英語力、歌唱力共に最高峰と記しておきたい。

授業ではGILLEの楽曲、AKB48の英語カバー曲であるFlying Get、も扱った。ただし、この曲は元々テンポが非常に速いのに加え、歌詞があたかもメロディに押し込まれているような部分があるので、歌うということに関してはおそらく最難関の部類に入る。そういう意味では実際に歌っている本人の力量のすごさに感服せざるをえない。履修者たちも、歌詞を英語にするだけでなく、この曲そのものを英語で歌えること自体の能力の高さに感銘を受けたような印象であった。なお、授業では英語を運用する活動のひとつとして、上記で紹介したような歌詞の英語の分析や英訳、詞を吟味する、聞く、歌う、に加え、毎回2人くらいに自分の好きな楽曲、あるいはアーティストに関する5分程度のミニプレゼンテーションを英語で行ってもらったりもした。選曲や内容は自由であるが、自らの英語でその魅力を伝えられるかどうかポイントである。中嶋は同様の活動をコンピュータ室で行い、リアルタイムでフィードバックをしている。(58-65)

こうして毎回いろんな楽曲を用いて歌詞の特徴や歌うコツなどを徐々に学んでいった後、最終課題に取り組んでもらった。内容の基本は、これまでも紹介してきたように、自分たちで「英語で歌詞を書き、あるいは訳し、英語で歌える」ことだが、学生たちとのやりとりの中で、一人で一曲全部担当するのは難しいとの声も聞かれたので、先の授業内容例でも紹介したように、四、五名を上限とするグループを作ってもらい、自分たちで決めた一曲を協力して創作、英訳してもらうことにした。開講時期が秋

1) <http://www.bfgfund.com/gille/category1/entry7.html> 2015年9月8日アクセス

学期の授業だったこともあり、最終授業は一月中旬、間に冬休みもあることから、その期間を利用してよく協力してもらえればとも思い、その提案を了承した。なお、曲の選択は日本のアーティストのものであれば任意とし、創作、英訳も自由ではあるが本来の歌詞のニュアンスから「かけ離れすぎないようにすること」は約束事とした。最終発表は最後の授業に設定したのだが、自分たちだけではアイデアが出て来ない、どうしても英語に訳せないなどの部分もあるだろうと予想されたので、事前の授業で全員に公開質問のような形で相談できる時間も設けた。やはり難しいポイントとしては、メロディに英語が合わない、日本語のニュアンスを英語で表現するのが難しいなどがあり、それらに対しては、執筆者含めクラス全員で知恵を出し合って考え、アドバイスしあった。

そうした苦闘の末に出来た各グループの作品（それぞれの選曲はAppendix 3を参照）を、最終授業では実際に発表の形で歌ってもらったのだが、カラオケの音源で歌うグループもあれば、ギターなどの楽器を持ち込み、文字通り生演奏でパフォーマンスしながら歌ったグループもあった。特に楽器を持ち込んだグループは、授業外でもかなり練習をしていたようで、発表後には他の履修者から大きな賞賛を得ていた。総じてどのグループもメロディにのせて歌うことが出来ており、あくまでグループとしてはあるが、授業開始当初に掲げた目標、「英語で歌詞を書き、あるいは訳し、英語で歌える」こと、は達成された。

### 3 学生からのフィードバックと今後の可能性

全授業終了後、学生たちから今回の授業に関するコメントをいくつかもらった。概ね好意的なものが多かったが、こういったポイントがよかったのかを具体的に示すため、代表的なものを紹介しておきたい。

英語演習という授業的な観点からみると、日本語の歌を英語にするという作業は想像以上に難しく、それぞれの言語の違いを新しい視点から気づくことが出来ました。日本語の表現の豊かさや英語のダイレクトな表現はそれぞれの文化を反映していると思いました。授業全体を振り返ると、別のグループとも歌の練習をしたり、全体で一つの曲を練習したりしてクラス全員が一体となって授業が出来たのではないかと思います。

このコメントからわかるように、やはり言語の違いへの気づきが大きな発見となったようである。授業内でも、英語ではIが主語として頻繁に使われる一方、日本語では主語をあまり明示しないという面や、男性が女性の気持ちを歌うというCross Gender Performanceは日本語ではあっても英語にはない（たとえばI Saw Her Standing Thereを女性が歌う場合はI Saw Him Standing Thereと代名詞を置き換える）ことなども説明した。また、歌うことの楽しさも授業への好評価の一つとして表れている。

なお、成績評価に関してはこの最終課題（作品としての英訳作成、グループで作ったとしても個人の担当箇所を明記し、一人ずつ上記のような振り返りのコメントと共にレポートの形での提出と、パフォーマンスした際の出来具合）に加え、毎回の授業における小課題（先に紹介したアクティビティへの参加など）、個人でのミニプレゼンテーション（自分の好きな楽曲を英語で紹介）を点数化し、合算



して総合成績として計算した。当然ではあるが、結果を振り返ってみると積極的に参加した履修者ほどよい成績となっていた。

このように、教材として歌を取り上げ、ただ聞くのではなく、自分たちで創り、歌うというという流れはすべての学生にあてはまるという言い過ぎだが、歌そのものに興味関心のある学生たちには強い学習動機となり、積極的な取り組みへと誘うことに成功した。もし今後また機会があり、今回のような、あるいは今回以上に積極的な学生たちに出会えたならば、よりパフォーマンスの機会を増やす、オーディエンスがもっといる場で発表する、その様子を録音、録画する、など更なる活動を試してみたい。

## おわりに

本稿では、まず歌を授業に活用する際の利点や注意点を紹介した。つぎに、日本人歌手が歌う/創る英語歌詞を用いた授業を紹介するにあたって、その過程を概観しつつ、具体的な内容にも言及した。その中で、日本語歌詞の英訳を創り歌うことがある一定の学生たちにはとても強い興味をかき立て、活動を促したことが確認された。最後に、そうした学生たちからのフィードバックと今後の展望も述べた。今回の一連の歌を用いた授業は、履修してくれた学生たちに恵まれたこともあり、担当者としても振り返ってみてとてもやりがいのある授業だったと言える。履修してくれた学生たちに感謝の念を記しつつ、本稿のおわりとしたい。

## 参考文献

中嶋洋一. 2000. 『“英語の歌”で英語好きにするハヤ技30』東京：明治図書



関戸 冬彦 (Sekido Fuyuhiko)

所属：獨協大学国際教養学部言語文化学科特任講師

専門：英語教育, アメリカ文学

Email：fuyuhiko@dokkyo.ac.jp

## Appendix 1

この「英語演習」(Songs & Lyrics with Exercises)では歌(音声的、パフォーマンス的側面)、歌詞(読解&解釈、文化・歴史的側面)などを用いながら、各自がすでに持つあらゆる英語能力を駆使し、さらなる総合的な英語力向上を図ろうというのがねらいである。予定している内容は、Critical studies for Songs & Lyrics (with performance) など。(一部抜粋)

## Appendix 2 授業内で扱った楽曲

Runaway (シャネルズ)  
Song Of Love / A Place In The Sun (河口恭吾)  
Glorious Days (布袋寅泰)  
Tears (X Japan)  
I Love You (尾崎豊 covered by Debbi Gibson)  
Kitto (THE ALFEE)  
Hungry Spider (槇原敬之)  
Flying Get (AKB48 covered by GILLE)  
Oogoe Diamond (AKB48)  
LA・LA・LA Love Song (久保田利伸 covered by BENI)  
One more time, One more chance (山崎まさよし covered by BENI)  
ワインレッドの心 (安全地帯 covered by BENI)  
M (Princess Princess covered by Eric Martin)  
いつかのメリークリスマス (B'z covered by Eric Martin)

## Appendix 3 学生(グループ)が最終課題で扱った楽曲

3月9日 (レミオロメン)  
さくらんぼ (大塚愛)  
楓 (スピッツ)  
Pop Star (平井堅)  
空も飛べるはず (スピッツ)